〈依頼論文〉

ディルタイの価値論

大野篤一郎

二〇〇四年に公刊されたドイツ語版『ディルタイ全集』第二四巻には「論理と価値」(Logik und Wert)というタイトルが編集者によって付けられている。その冒頭に置かれた「一九〇六年夏学期の講義」の本来の表題は「哲学体系概説」(System der Philosophie in Grundzügen)であった。ドイツ語版『ディルタイ全集』第二〇巻、三九七ページに書かれた編者の解説によると、ディルタイは、一八九八年から一九〇六年まで、毎年夏学期に、同じ表題の講義を行っていた。このうち、一八九九年夏学期の講義は、「体系一」という表題で、『ディルタイ全集』第二〇巻の二三五―三三一ページに、一九〇三年夏学期の講義は「体系二」という表題で、同書、三三二―三八〇ページに収録されている。[1] この一九〇六年の「夏学期の講義」自体は、当時、ディルタイの助手であり、後に娘婿となったゲオルク・ミッシュ(1878-1965)の筆記ノートを底本に使用しているが、ドイツ語版で、一ページから一五ページまでしかなく、講義の筆記ノートというよりは、むしろ講義の要約であると言える。ディルタイは、このノートに基づいて、講義の直後に、「夏の編集」(Sommerredaktion)という表題のついたノートをミッシュに口述筆記させている。こちらは、同書、一六ページから、五九ページまであり、「夏学期の講義」と合わせると両方に重複箇所があるにしても、全体で五九ページほどになる。

そもそも、この「哲学体系概説」は、ディルタイが完成することができなかった『精神科学序説』第二部の「精神科学の基礎づけ」の試みの一つであった。そのことは「夏学期の講義」の序論で、ディルタイが「哲学は、精神科学の基礎づけの上に置かれ、個別科学の中に実現される連関を研究しようと企てる。

こうして、哲学の第二部として、諸科学の体系が生じる」(XXIV, 4)[2]と書いていることからも明らかである。この当時のディルタイは、哲学自体明らかに精神科学の一部であるから、精神科学の基礎づけは同時に哲学をも基礎づけるものであり、その上にのみ、他の精神科学の基礎づけが可能になると考えていた。そこで、次にこの講義においてディルタイが「精神科学の基礎づけ」をどういう形で展開しているかを見てみよう。

一　生の構造連関

ディルタイにとっては、哲学を含めたあらゆる精神科学の基礎には生の概念がある。その意味で彼の哲学を「生の哲学」と呼ぶことは適切であると言える。しかも、彼にとっては、生は意識的生であり、意識を持たない生は、精神科学の基礎にはなり得ないと考えられている。そのことは、彼の次のような言葉からも窺うことができる。ディルタイは、「生とは自己同一的な主観が変化しやすい対象的な世界にして変化する関わりを経る経過(Verlauf)である」(XXIV, 1)と述べた後、「体験は、この生から切り取られた一断面である」(*ibid.*)と述べている。ここでは、生はまず、「経過」として通時的に捉えられ、次に、ある瞬間における生の断面が「体験」であると捉えられている。さて、体験においては、表象作用と感情作用と意志作用とが区別され、それらの間に構造連関が成り立っていると考えられる。他方で、体験は、時間的な観点から見ると、既に過ぎ去った体験から現在の体験を経て未来へと進む時間的経過をなしている。そしてこの体験の時間的経過の総体が生である。ディルタイの生の概念を理解するために、われわれは次に「生の構造連関」について考察しよう。

心的生は外界からの感覚的刺激を通じてさまざまな表象を受け取る。それらの表象は、次に感情や衝動によって評定され、その評定に基づいて意志は、外界に対して働きかける。これが心的生において、感覚・表象・感情・衝動・意志などの作用が互いに構造的に連関しているということの意味である。この心的生の構造連関を基礎として彼の記述的心理学は展開されている。[3]

更に、ディルタイは、先に述べた表象・感情・衝動・意志の構造連関が合目的的であると主張する。構造連関を心理学的に分析することによって、その合目的性を証明することは可能だと彼は考えているが、実際には、その合目的性は、生物の構造や機能の持っている合目的性を暗黙の前提としているように見える。ついでに言うと、ディルタイにおいては、社会や歴史の合目的性もこの構造連関の合目的性に基づいている。

二　「思考の基本的論理操作」から価値論へ

「夏の編集」の第四章では、「思考の基本的論理操作」がテー

マとして論じられている。思考の基本的論理操作とは、ディルタイによれば、言語を使わないで行われる思考の働きであって、それは「区別する」、「同一視する」、「程度の違いを比較する」、「結合する」などの思考の働きを意味している。

知覚の中に既に思考の論理操作が加わっており、したがって、知覚には知的性格が既に備わっているという点に、したがって、知覚は単に受動的であるのではなく一種の能動性を持っているという点に、ディルタイの認識論の一つの特色があり、それは感覚の受動性と思考の能動性とを明確に区別することによって認識論を構成したカントの立場への批判に基づいている。

この基本的論理操作の例として次のような例を彼は挙げている。われわれは一つのリンゴにおいてその色と匂いとを区別する。そして、区別された二つの感覚的性質は再び特定のリンゴにおいて結びつけられる。言い換えるとこの二つの操作に基づいて「このリンゴは、赤い色とこのような匂いとを持っている」と認識される。あるいは、われわれは灰色・青色・赤色という特殊な色彩を見て、抽象作用によって、「色」と称する一般観念を作ることができる。同様に、また、われわれは、類似した動物において、容易に共通したものを認識する。異なったものから同一のものを切り離すことは、同一化や区別という思考の操作を前提しているとディルタイは言う。これらの操作が抽象作用であって、それによって、普遍観念が生じ、それが言語と論議的思考を形成するための基礎をなしている。

更に、ディルタイは、区別・同一視・程度の規定・分離・結合などの基本的論理操作を「二次的知覚」と呼ぶ。これらは、印象そのものではなくて、印象と印象の間に成り立つ関係の知覚であるとディルタイは主張する。もっとも、ディルタイも思考の操作によって成り立つ関係を知覚と呼ぶことの難点に気付いている。たとえば、対象Aと対象Bとが同一であるというのは、知覚作用ではなくて思考作用であり、しかも、言語、あるいは記号を用いることによって、初めて表現可能となるような事態であることを彼が全く無視しているわけではない。しかし、既に述べたように、ディルタイが知覚のレベルにおいて言語を使用する以前の思考の操作を認める点に彼の認識論の特色があると言うことはできるだろう。

この思考の中に生じる関係は、知覚において把握可能なものとは異なる性格を持っている。知覚において把握可能なものは、現実性の意識を伴っているが、思考において把握可能なものは、所与によって強いられているという意識、何かを措定するという意識を伴っている。この強いられているということが必然性という概念で言い表わされる。こうして、論理的連関の中に必然性の意識が入り込み、それは知覚における現実性の意識と区別される。思考が発達することによって、分析的判断が主語の中に含まれたものを述語において強調する場合に、同じ必然性の意識が現れる。なぜなら、分析的判断においては、主語の中に含まれたものを主語について述語するという強制が存在する

からである。普遍妥当的判断にもこの必然性が伴っているとディルタイは言う。

判断の明証性や必然性についてのこのような説明は、ディルタイの場合、全く心理学的であると言っていい。これは、ディルタイが良く知っていたクリストフ・ジークヴァルト（1830-1904）やベンノー・エルトマン（1851-1921）などの論理学の影響だろうと推測される。

「夏の編集」の第四章第二節では、感情的生や衝動的生の領域で思考の基本的論理操作がどのように働いているかが叙述されている。ディルタイによれば、論理操作を通じて、感情的生や衝動的生は、価値や財についての非常に抽象的な洞察へと高められる。現実判断が価値や財についての判断の基礎となっているが、現実の諸条件の下にある価値規定は、その内的構造に関して、単なる現実規定とは異なっているということを彼は認める。

価値規定の問題を解明するためには、われわれはもう一度、生の構造連関に立ち戻らなければならない。知覚による外界の把握と外界へと働きかける意志の合目的的行為とは、われわれの感覚的認識と関係することによって明晰さを持つようになる。そもそも、われわれの感情や衝動や情熱が個体や類の保存維持にとって合目的的であるが故に、われわれは合目的に行為したり、生により高い目的をあたえることが可能なのだとディルタイは言う。心的生のこの領域で、合目的性という根本形式の助けを借りて、思考のより高い形式への発展を引き起こすものが「経験」である。そしてこの経験から、偶然的なもの、個別的なもの、相対的なものについての感覚的知覚に基づいて、思考の論理操作を介して、概念的連関が獲得される。ディルタイはこの経験を「生の経験」（Lebenserfahrung）と呼ぶ。[4] そして更にこの経験の対象は、「生の価値」（Lebenswerte）であると彼は言う。この概念を彼はどう理解しているのであろうか。ディルタイはこの箇所（XXIV, 31）では、所有と親子関係と婚姻を「生の価値」の例としてあげている。また、他の箇所（XXIV, 38）では、摂食・成長・性愛・名誉欲・生活の保全などの契機を巡って「生の価値」の評価が行われると述べているので、「生の価値」は、「生を促進する価値」を意味していると考えられる。しかし、同時に彼は「生の価値」を「生の意義」（Bedeutung des Lebens）とか「生の意味」（Sinn des Lebens）と述べている箇所（XXIV, 35）があり、「生そのものが持っている価値」、あるいは「そのために生が価値をもつもの」を指しているように見える。そういうわけで、この概念を一義的に理解するにはかなりの困難が感じられる。私は、「生の価値」という概念は主として「生を促進する価値」を意味しており、二次的に「生のもっている意味、あるいは目的」を意味していると考えている。

ディルタイは、「生の価値が現れるすべての体験は、生の経験であり、最も重要で最も深い経験をわれわれは自分の中です

るのだ」(XXIV, 24) と述べている。ここでは、そこで生の価値が現れる体験が「生の経験」と呼ばれており、何が生を促進する価値であるかを判定するためには、生の経験が必要であると考えられている。

更に、「われわれは、人間の情熱を知覚する傍観者として、彼ら自身を混乱させ、他人との関係を解体するように導く情熱やそれから帰結する苦悩を学ぶ。更に人類の運命を示す歴史や文学を学ぶことによって、これらの生の経験を補う。哲学者は、彼らの形而上学を通してこのような力を及ぼす」(XXIV, 32) とディルタイは言う。このように、歴史や文学や哲学を学ぶことによって、われわれは生についての個人的経験を乗り越えることが可能であり、それによって、生の経験が拡大され、深化されるとディルタイは主張している。

次に、ディルタイは「価値とは何か」という問いを提出し、それに対して、「快、あるいは満足によって特徴づけられた状態、あるいはその状態を産み出す対象である」(XXIV, 33) と答えている。しかし、これだけでは、ディルタイが価値を主観的な状態と考えているのか、対象の性質と考えているのかが明らかではない。そこでわれわれは、価値判断が客観性を持ちうるかどうか、持ちうるとしたらどうして客観性を持つのかを論じている遺稿「生の価値と価値判断」(XXIV, 226-242) を取り上げることにする。

三　「生の価値と価値判断」

価値判断に課せられた論理的問題は、主語と述語との関係とはどのようなものか、つまり、価値判断における述定の性格とはどのようなものかという問題だとディルタイは考える。「生の連関に基づいて諸対象に価値があると認める判断は、私が『この暖かさは私には快い』とか、『この人間は我慢できない』とか言う場合にすでに存在している」(XXIV, 229) とディルタイは言う。これと区別される価値判断の例として、彼は「エネルギーの性質は、生にとっては有用だ」という判断を挙げている。前者においては、「暖かさ」は、一個人である私にのみ妥当する概念であるが、エネルギーの性質が「すべての生」にとって有用だと主張する後者では、「エネルギーが個人に対して有益であるか有害であるかという生連関にあるすべての事例が、有用性にしたがう圧倒的に肯定的な価値規定の判断に導く」(XXIV, 229) とディルタイは述べている。言い換えるとこの判断はエネルギーについて有用性を述語することによって、客観的判断であると言える。なぜなら、それは価値評定する[5]個々の主観とは無関係に対象が有用だと価値評定される可能性を認めているからだとディルタイは言う。そこで彼は、「対象の価値は変移する複数の主観の可変性とは独立に持続している」と主張している。このことは、普遍妥当的な価値判断の論理的性格

は、カント派の哲学者が主張するように、あるアプリオリに基づけられるのではなく、単にある対象についての価値評定は、価値評定する主観の移り変わりとは独立しているということを意味している。だから客観的な判断が成り立つために、リッケルトのように「意識一般」(Bewußtsein überhaupt)[6]を要請する必要はない。しかし、ディルタイの場合、価値述語が何を意味しているかは、その背後にある価値評定という主観的体験によってのみ明らかになるとすると、主観の価値評定とは独立に価値が存在するという主張は成り立たないように思われる。

ディルタイは、更に別の箇所(XXIV, 231)では、ある対象がある価値を持つという判断の中の特徴的な性質がどのように基づけられ得るかという問題を取り上げている。

そこでは、彼は、「対象や人物の表象に価値を結びつけるのではなくて、対象や人物の存在に結びつけ、存在だけでなく、(対象や人物の)表象との不動の関係に結びつける価値評定(Werthaltung)が存在する」(XXIV, 231)と述べている。そして、その不動の関係は、一般に対象に対する支配、それに対する力、われわれにとって対象の処分可能性であると言い表すことができる。結局、その関係は、対象と価値評定する主観とを価値的に関係させる関係であるとディルタイは言う。そうだとすると、ある友人がわれわれにとって価値があるための条件は、彼が存在し、われわれの生活へのある種の関わり合いが述語されることである。こうして、存在すると同時にわれわれの生連関の中にあると規定される対象は、客観的価値を持つというのは経験的判断であるとディルタイ言っている。しかし、ここでは対象がまず存在することが対象の価値が存在するための条件だと考えられているが、対象が客観的に存在するからといって、その価値も客観的に存在するとは言えないように私には思われる。これは同一の対象がそれを評価する主観によって全く異なった評価を受けることから明らかである。

更にディルタイは、「客観的価値判断は、瞬間的主観的な価値評定には基づけられず、それを基づけるためには、可能性としての対象の中に含まれた価値評定体験を要求するのであって、その体験は判断の中に含まれた述語概念の体験による充実を実現するのに十分である」と言う。このディルタイの主張の背後には、概念が体験によって充実されることによって客観的認識が成り立つというフッサールが『論理学研究』で展開した議論があると思われる。[7] 体験による価値述語の「意味充実」は、これまで、価値述語が意味しているものが、主観的な価値評定だとすると、価値述語は客観的な意味を持つということを主張するのは難しいと思われる。ところが、フッサールの「意味充実作用」という考えを導入することによってディルタイは、価値述語に客観的意味を持たせることが可能だと考えたと思われる。この箇所以外にもディルタイが概念は体験によって意味充実されることが可能だと考えている箇所はいくつか見出されるが、それが可能であるためには意味志向と意味充実との区別が前提

されなければならないのに、ディルタイが、この箇所以外で判断志向などについて語っている箇所は、私の知る限りないので、フッサールの現象学的認識論をディルタイが十分理解した上でこれらの用語を使用しているかどうかは疑わしく思われる。

ディルタイの価値論について語る場合、恐らく見落とせない箇所が、未完に終わった『精神科学序説』第二巻のために書かれた草稿「生の連関における価値の成立」(XIX, 283-285)[8]の中に見出される。そこでは、ディルタイは、価値の成立自体が、単なる個人的体験を超えていることを次のように説明している。

「個人を支配し、個人をはるかに凌駕して持続しつつ広がっている種々の価値が成立するのは、ある実在的な連関が現存していて、そこで個人の行為がいわば妨げられずに条件付けられながら作用する場合だけである。……一定の働きや思考過程は、個人を超えた連関に妨げなく属していると感じられる。……これらの行為や思考過程は、より大きな全体の内部で、互いに関わり合っており、個人の個別的な意志に基づかず、そこではメンバーがそのより包括的な目的に結びついているある連関を形成する」(*ibid.*)ことによって、超個人的な全体に内在する価値や自己目的が成立するのだとディルタイは主張している。ここで、ディルタイが価値や目的の成立根拠として、「超個人的連関」という概念を使用していることに注目したい。更に彼は、「ある内容の価値がすべての個人的意識から解放されて、普遍的・超個人的に現れるとすれば、このことはその内容が、どの意識においてもそのように(つまり、普遍的、超個人的に―筆者の付加)感じられるので、どの意識において、あるいは、どれほど多くの意識において、その内容が経験されるかは全くどうでもよい。したがって、その内容は、意識と独立ではないが、すべての個別的な意識からは独立している」(XXIV, 284)と説明している。更に、ディルタイは、この内容が個別的な意識から独立している理由が、「意識そのものにおいては、意識の個人的独自性が変わるということを度外視すれば、ある内容と感情との間に一定の関係が存立するという点にある」(*ibid.*)と述べている。

更に、ディルタイは、われわれが不正よりも正義を選ぶ理由として、「おそらくは、社会の秩序や平和が正義によってもたらされるからであろう」(*ibid.*)とも述べている。このことは、われわれの個人的な価値判断の背後には社会的歴史的背景があると言うことを意味している。それゆえ、彼は「われわれが感情のうちで普遍妥当的なものとして出会う多くのものは、なんと言っても歴史的に発展してきたものである」(*ibid.*)と述べている。

ここで使われている「超個人的意識」というかなり形而上学的色彩の強い概念を避けようとすれば、これを「社会的共同主観性」と置き換えることができるのではないかと思われる。

第二四巻の二三六ページにも、「その価値を評価する主観が共同体であるような生の価値は、その対象との生連関に基づい

て共同体について述語される」という表題を持った遺稿がある。ここではディルタイは、「われわれは、これまで個人が遂行し、彼の生連関に関わる価値評定を考察したが、全体のために、対象・能力・人物・制度に与えられる価値も存在する」（XXIV, 236）と述べている。このような全体のためのに、「生の価値」を評価する経験があるとしたら。それは共同体そのものが共通の生の経験を持たなければならいだろう。実際、ディルタイが個人的「生の経験」と並んで、一般的な「生の経験」というものを考えていたことは、次の箇所からも明らかである。

「価値評価が形成される諸連関」（XXIV, 213）という表題を持った遺稿の中で、ディルタイは、「社会の共通の経験が効果を発揮する。社会が生み出した法と道徳は、その背景にこの経験において得られた価値の段階についての観念を持っている」と述べているが、これは、これまでもっぱら個人の「生の経験」とその対象としての「生の価値」が問題になっていたのに対して、ここでは、社会にも同じような「生の経験」があり、そこでは、共通の価値評価が行われると考えられている。個人に「生の経験」があるとしても、それを根拠に社会にも共通の「生の経験」あるだろうというのは類推推理に過ぎないという批判は可能だろう。しかし、ディルタイにとっては、社会そのものが、個人と個人の間の相互作用において成り立つと考えられていたから、この推理は、彼にとってはそれほど飛躍した論理ではなかったと思われる。

四　まとめ

以上、二つのテキストを中心に、ディルタイの価値論を論じてきた。

「夏の編集」においては、ディルタイは、心的生の構造連関に基づいて、どうして価値感情やそれに基づく価値評価が可能になるかを発生論的、あるいは目的論的に根拠づけようとしている。その重点は、生の構造連関から、どのようにして「生の価値」を対象とする「生の経験」が成立するか、また、「生の価値」以外に外的対象の価値や能力の価値などがどのようにして成立するかを叙述しようとした点にある。

それに対して、「生の価値と価値評価」という遺稿では、ディルタイは、この発生論的な議論に満足せず、「どうして価値判断が客観性を持つことができるか」という認識論的議論を展開しようとしている。第四の社会のもつ生の経験に基づく生の価値の客観性の議論がもっと共同主観性に基づいて展開されていれば、それは価値の共同主観的客観性の証明となっただろうと思われるが、ディルタイの叙述はそこまでは及んでいない。

『全集』第二四巻に収録されている他の幾つかの断片においても、ディルタイは、価値判断を論じているけれども、私の見るところでは重要な論証は、前節で述べたものに尽きており、後はあまりに断片的で彼の思考の筋道を追跡するには不十分で

あるように思われる。

いずれにしても、彼が構想した「精神科学の基礎づけ」の中で現実世界の認識と並んで、価値評価の問題がかなり重要な位置を占めている理由は、精神科学が、表象・感情・意志という心的生の三つの構成要素からなる構造連関の上に構築されるべきものと考えられていたからである。前節でも述べたとおり、感性と悟性の明確な区別の上に可能であったカントの認識論に対して、知覚そのものに知的性格を認めるディルタイの認識論は、「基本的論理操作」のような先述語的思考を認める点に特色があったにせよ、判断論を中心にした論議的思考についての究明が不十分であったことも認めなければならないだろう。生の概念から出発した彼の哲学が論議的思考の構造を十分解明できなかったことが、価値判断の客観性を論証する際にも大きな妨げになっているという印象は残念ながら拭うことができない。

注

（1）一八九九年夏学期と一九〇三年夏学期に行われた二つの「哲学体系講義」は、日本語版『ディルタイ全集』第三巻（法政大学出版局、二〇〇三年）の二七一―四七六ページに訳出されている。

（2）Wilhelm Dilthey, *Gesammelte Schriften*. 26 Bde, Stuttgart & Göttingen, 1951-2007 から引用する際、巻数をローマ数字で、ページ数をアラビア数字で表記した。

（3）ディルタイの記述的心理学は、「記述的分析的心理学の諸想」という題の論文として右記の *Gesammelte Schriften*, Bd. V, S. 139-240 に収載されている。日本語版では、『ディルタイ全集』第三巻、法政大学出版局、二〇〇三年、六三七―七五六ページに訳出されている。

（4）「生の経験」という概念については、ドイツ語版『全集』第八巻に収録されている『世界観学の諸類型』の中に「生の経験」いう表題をもった節がある。（VIII, 80）また、『全集』第七巻に収録されている「精神科学における歴史的世界の構築」でも「生の経験」に基づいて精神科学の成立が論じられている。（VII, 132-137）前者は、一九一一年に論文集『世界観・哲学・宗教』において公刊され、後者は一九一〇年にプロイセン科学アカデミーの「研究報告」として公刊されたものであって、ここでわれわれが取り上げた遺稿よりも「生の経験」についての説明がより明確になっているように思われる。しかし、この概念は、一八六四年に書かれた教授資格請求論文「道徳意識の分析の試み」で既に使用されており、そこでは道徳意識が「生の経験」から説明されている（日本語版『ディルタイ全集』第六巻、三六ページ参照）。したがって、この概念は、ディルタイの著作においては、その最初期から用いられたキーワードの一つだと言える。

（5）「価値評定する」という訳語の原語は、“werthalten”というドイツ語であるが、この語は、マイノングやフッサールでは、価値判断に先立つ「感情に基づく主観的な評価」を意味している場合が多く、ディルタイの用法もおおむねそれに従

っていると言える。しかし、この箇所のように、価値評定によって価値の客観性が確立されるかのような表現も見出される。フッサールの用法については、Edmund Husserl, *Gesammelte Schriften*. Bd. 2: *Logische Untersuchungen*, Erster Band. Hamburg, 1975, S, 56 を参照。

(6) Heinrich Rickert, *Der Gegenstand der Erkenntnis: Einführung in die Transzendentalphilosophie*. 2. erweiterte Auflage, Tübingen & Leipzig, 1904, S, 146.

(7) フッサールの『論理学研究』の初版が出た後で、ディルタイがそれをゼミでテキストとして使用したことはよく知られている。特に、フッサールへの言及が多いのは、ドイツ語版『全集』第七巻に収められた「第二研究　知の構造連関」と題する論文で、これは一九〇五年三月二三日に「プロイセン科学アカデミー」で行われた研究報告である。

(8) この箇所は、日本語版『ディルタイ全集』第二巻、四〇六―四一〇ページに訳出されている。以下の引用においては、筆者の判断で訳語を何箇所か変更したことをお断りする。

（おおの　とくいちろう）